

社会的笑いの表出に対する意識についての日中比較

目白大学心理学研究科 李 珊
目白大学社会学部 渋谷 昌三

【要 約】

本研究は社会性がある笑いに着目し、日中作り笑い表出に影響を与える潜在的要因を見出し、その文化差と性差について検討することを目的とした。参加者（日本人大学生、大学院生男性109名、女性194名；中国人大学生、大学院生男性106名、女性110名、不明2名計218名）に対して質問紙調査を行った結果、日中作り笑い表出に影響する要因が4つずつ見出され、そのうちの2つの要因が日中共通しているが、同じ状況での表出は文化によって異なる意味を持つ可能性も示された。表出パターンについても日中3つずつ見出され、作り笑い表出について日本人にはネガティブ感情抑制と雰囲気作り、中国人にはポジティブ印象作り規則が確認できた。性差については、特定された表出パターンを持つ日本人参加者のみに見られ、中国人参加者には見られなかった。

キーワード：作り笑い、笑い表出、笑いの表示規則、日中比較、文化差

問 題

笑いは人々を結び付ける社会的な行為である (Provine, 2000)。ヒトは乳幼児のときから笑う能力をもち始め (Fox & Davidson, 1988; Kaye & Fogel, 1980; Sroufe, 1995; Wolff, 1987), それで成長に遂げる環境 (時代と社会) との相互作用の中でさまざまな能力として顕在化され (井上, 2004), 様々な社交機能を果たしている。社会的スキルとしてわれわれの生活とともにあるものである。その社会機能については, Ekman & Friesen (1975 工藤力訳 1987) の表情コントロール技法についての考察から挙げられる。Ekmanらは、人は自分の感情を表出し、表情をコントロールすることで他者に影響を及ぼそうとするが、コントロールする表情の中でも笑い、特に微笑が重要な役割を果たしていると指摘している。たとえば、人は、自分の感情表出の注釈として、よく笑いを見せる。怒った後に故意に微笑むのは、自分の怒りがそれほど強くはないことを補足的に伝えようとする

のであり、恐怖や悲しみの表情を示した後で故意に笑顔を見せるのは、自分が恐怖や悲しみに耐えられることを他人に知らせる注釈行為といえる。また注釈とは別に、真の感情を隠蔽、擬装するためにも笑いは使われる。面白く感じていないのに空笑いする (擬態)、悲しみや恐怖の感情を他人に悟られないようにするため笑顔を見せる (隠蔽) などである。このような笑いの表出は、表示規則 (display rules) (Ekman & Friesen, 1969, 1975 工藤力訳 1987) の管理の下で行っている。表示規則は、本当に感じているかどうかを別にして、ある場面でどのような情動を感じていることを示すべきかについての規則であり、Ekman & Friesen (1975 工藤力訳 1987) は表示規則に文化差が示すことを指摘している。笑いの表出と文化の関係が深く、文化的取り決めによってつくられるほほえみは「社交上の笑い」、つまり一種の作り笑いである。

数少ない作り笑いに対する実証的な研究とし

て、押見（1999）は社会的スキルとしての作り笑いの意図、目的によって、日常生活において見られる作り笑いの行動項目を収集し、作り笑い尺度の作成を試みている。その結果、不愉快さや悲しい気持ち、罰の悪い思いなど、ネガティブな感情を解消ないし隠蔽する意図の「感情制御」の作り笑い、他者を和ませることで場の緊張的雰囲気や解消したり、場を盛り上げようとしたりする意図の「雰囲気操作」の作り笑い、それに他者の行為を矯正・統制しようとする意図の「行為統制」の作り笑いがあることを明らかにした。押見（1999）によると、作り笑いは、対人関係において何らかの個人的目的を達成ないし促進するために、自己に注意を向けて行動の自己調整を積極的に従事するという自己フォーカスの性質を有している。また、作り笑いには、そのまま表出すると自分にとってマイナスの効果をもたらす感情を隠蔽するような社会的受容の性質が含まれている。さらに、冷笑・嘲笑のような作り笑いは、自己の価値判断に強く依存した自分本位の自己中心性の性質を持つ反応である。これらの考えから、公的自己意識と作り笑い（感情制御、行為統制）の間に正の相関関係があることを見出している。また、押見（2002）は作り笑いが生起する状況の対人関係の親密さ要因を考慮し、公的自己意識が作り笑いの表出行動に影響を与えることを見出したが、文化差について扱われなかった。

笑いに限らない表情の比較研究は、ほとんど欧米を中心としたものであり、日本人表情の比較研究においても日米比較が主流になっている（たとえば、中村、1991）。同じアジア圏の表情比較研究がまだ数少ない状態である。趙（2000）は、日中表示規則を比較した結果、公的状況において、日本人はネガティブな感情抑制規則があるのに対して、中国人はポジティブな感情抑制規則が存在することを明らかにした。しかし、中国人の笑い表出の規則はまだはっきりとされていない。そこで本研究は社会的スキルとしての作り笑いに注目し、同じアジア圏と認識されながら異なる文化および民族特性を持つ中国人と日本人の笑い表出の類似性と差異性を探索的に調べることを目的とした。日本人の感情抑制規則は作り笑いを表出する動機に

も考えられる。浅田（2004）は日本文化における笑いは「相手にいやな思いをさせたくない」心性の表現であり、否定的感情をもつ表情を隠すためのほほえむ表出であると考察している。自他の区分が曖昧で独立主体としての「個」の意識が弱く、周囲の他者に規定されがちなのが日本人の民族特性としてさまざまな理論的観点から論じられている（浜口、1977；Markus & Kitayama, 1991；南、1983）。これに対して、中国人は「己」を自己だけでなく、血縁関係や親密関係を持つ他者に拡張して強く意識している（費、1947/1985；楊、1991）、面子を重んじる（黄、2010）特性を持っている。したがって、作り笑いの表出に対する意識に当たって、日本人は社会的受容、中国人は自己フォーカスが主であることが予想される。

方 法

1. 調査参加者と手続き

都内複数の大学に属する日本人男性109名（18歳～57歳）、女性194名（18歳～55歳）計303名（内訳大学生209名、大学院生94名；平均年齢22.16歳、標準偏差6.38）と中国中部の銀川市と西安市にある複数の大学に属する中国人男性106名（18歳～54歳）、女性110名（18歳～24歳）、不明2名（21歳～22歳）計218名（内訳大学生178名、大学院生40名；平均年齢21.09歳、標準偏差2.56）の参加者の協力を得られた。質問紙は個別配布個別回収形式で実施された。回答はいずれも無記名で行われた。

2. 調査時期

2011年3月～5月

3. 調査内容

基本属性として調査参加者の性別と年齢を尋ねた。

また、社会的笑いの表出を測定するために、作り笑い尺度（押見、1999）を用いた。20項目につき「1. 全くあてはまらない」から「5. 非常にあてはまる」までの5件法で回答を求めた。

なお、中国人調査参加者に対する質問紙の翻訳に当たっては、調査実施者および、日本へ留

学経験8年間以上の中国人大学院生（日本語教育専攻）3名，中国に在住10年以上の日本人大学教員2名計6名でバックトランスレーションにより訳文を校正，添削した。

結 果

1. 作り笑い尺度の構成

社会的笑いの表出に影響を与える要因を引き出すために，日中参加者別に作り笑い尺度項目に対して因子分析を行った。数少ない50代の調査参加者（日本人4人，中国人1人）が結果に影響を与える可能性を考えて，50代参加者を除いて因子分析を行った結果はほぼ同一であるため，50代参加者を込みにして処理した結果を掲げた。

日本人の作り笑い尺度構成 天井効果が生じた3項目を分析から除外し，計17項目を用いて因子分析（重み付きのない最小二乗法，スクリープロットにより因子数を決定，プロマックス回転）を行った。ただし，各項目のうち，因子負荷が.35に満たなかった2項目と複数の因子に.35以上の負荷量を示した1項目を削除し，再度，因子分析を行った。重み付けのない最小二乗法を用い，因子抽出した。因子数はスクリープロットにより判断し4因子とし，プロマックス回転を行った。最終的な分析結果をTable 1に示した。

第I因子は「9. 仲間同士で過ごすときは，人を笑わせる行為を進んでする」，「10. 自分の失敗を笑い話のネタとする」，「17. その場の雰囲気

Table 1 日本人参加者の作り笑い尺度項目に対する因子分析結果（プロマックス回転後の因子負荷量）

	因子I	因子II	因子III	因子IV
第I因子 雰囲気作り ($\alpha = .75$)				
9. 仲間同士で過ごすときは，人を笑わせる行為を進んでする	.892	-.102	-.046	.062
10. 自分の失敗を笑い話のネタとする	.632	-.010	.044	-.034
17. その場の雰囲気を和らげるために，人を笑わせようとすることがある	.613	.089	.038	-.008
第II因子 相手への配慮 ($\alpha = .63$)				
13. 怒った直後に，笑顔を見せて相手を許すことがある	.012	.622	-.034	-.034
14. 顔で笑って心で泣いたようなことがある	-.016	.598	.157	-.175
19. 深刻な身の上話を笑顔をまじえて話すことがある	-.095	.534	-.099	.162
16. 相手が不愉快そうな時，わざと笑顔で接するようにする	-.029	.380	-.008	.222
11. 他の人と一緒に何か怖い目に遭った後は笑い顔を見せようと努めることがある	.133	.358	.004	.104
第III因子 本音隠し ($\alpha = .60$)				
8. 自分の内心の不愉快さを知られないように，作り笑顔をするこがある	.021	-.013	.779	.019
6. 仲間が笑っているときは，面白くなくても笑うふりをする	-.074	-.057	.594	.179
2. 内心嫌っている人でも，笑顔で挨拶する	.164	.081	.378	-.137
第IV因子 仲間意識 ($\alpha = .54$)				
20. 自分が所属しないグループのことをからかって仲間同士で笑い合うことがある	-.094	-.068	.117	.627
15. グループの和を壊すような行為をした仲間をからかって笑いにすることがある	.058	.104	.012	.451
12. 友人と皮肉って，みんなの笑いを誘うことがある	.184	.105	-.051	.425
因子間相関	因子I	.476	.276	.221
	因子II		.391	.285
	因子III			.078

気を和らげるために、人を笑わせようとするところがある」に対して負荷量が高かった。これらの項目はその場の空気を重視していて、その場の雰囲気感を良くさせる意図から「雰囲気作り」因子とした。第Ⅱ因子は、「13. 怒った直後に、笑顔を見せて相手を許すことがある」、「14. 顔で笑って心で泣いたようなことがある」、「19. 深刻な身の上話を笑顔をまじえて話すことがある」などで負荷量が高く、相手にネガティブな気持ちをさせない意図から「相手への配慮」に関する因子とした。第Ⅲ因子は「8. 自分の内心の不愉快さを知らないように、作り笑顔をすることがある」、「6. 仲間が笑っているときは、面白くなくても笑うふりをする」、「2. 内心嫌っている人でも、笑顔で挨拶する」に対して負荷量が高く、自分の本当の気持ちをばれないように笑顔を作る意図から、「本音隠し」に関する因子とした。第Ⅳ因子は「20. 自分が所属しないグループのことをからかって仲間同士で笑い合うことがある」、「15. グループの和を壊すような行為をした仲間をからかって笑いものにする」とある、「12. 友人と皮肉って、みんなの笑いを誘うことがある」に対して負荷量が高かった。これらの項目は、グループメンバーの繋がりを重視していて、「仲間意識」に関する因子とした。4つの因子の間の相関は、Table 1に示した。

これらの因子ごとに項目の回答得点を加算し項目数で割った値を下位尺度得点とした。回答は、「まったく当てはまらない～非常に当てはまる」で行ったため、尺度得点が高いほど、雰囲気作り、相手への配慮、本音隠し、仲間意識のための笑いを多く表出することを表す。

Cronbachの α 係数を求めたところ、項目全体が.75、雰囲気作りが.75、相手への配慮が.63、本音隠しが.60、仲間意識が.54であった。第Ⅲ因子と第Ⅳ因子が低い値であるが、少ない項目数として内的整合性をある程度有していると考えられる。本研究は日本人の作り笑いの表出概況を窺う視点で、これらの項目が必要であると考えられ、その後の分析に採用された。

中国人の作り笑い尺度構成 天井効果が生じた1項目を分析から除外し、計19項目に対して重み付きのない最小二乗法による因子分析を

行った。固有値1.0以上の因子は6因子抽出されたが、スクリープロットの検討に基づき4因子解を適当と判断した。そこで4因子解を指定し、重み付きのない最小二乗法、プロマックス回転による因子分析を行った。どの因子にも負荷量が.35に満たない8項目を削除し、最終的な分析結果をTable 2に示した。第Ⅰ因子は「11. 他に人と一緒に何か怖い目に遭った後は笑い顔を見せようと努めることがある」、「16. 相手が不愉快そうな時、わざと笑顔で接するようにする」、「17. その場の雰囲気感を和らげるために、人を笑わせようとするところがある」などに対して負荷量が高かった。これらの項目内容は日本人参加者の作り笑い尺度の第Ⅱ因子とほぼ同じく、相手の気持ちをよくさせる意図が窺え、日本人の作り笑い尺度と同じく「相手への配慮」に関する因子とした。第Ⅱ因子は、「7. 目の上の人に会うときは、笑顔で接するようにする」、「6. 仲間が笑っているときは、面白くなくても笑うふりをする」で負荷量が高く、相手から気に入られる、好感を博しようとする意図から「機嫌取り」に関する因子とした。第Ⅲ因子は「20. 自分が所属しないグループのことをからかって仲間同士で笑い合うことがある」、「15. グループの和を壊すような行為をした仲間をからかって笑いものにする」とある、「15. グループの和を壊すような行為をした仲間をからかって笑いものにする」とあるに対して負荷量が高く、日本人の作り笑い尺度と同じく「仲間意識」に関する因子とした。第Ⅳ因子は、「2. 内心嫌っている人でも、笑顔で挨拶する」、「3. 初対面の人と会う時は、笑顔で挨拶する」、「1. 悲しい気持ちの時に人と会う際は、特に笑顔を示そうと心がける」に対して負荷量が高く、「礼儀としての挨拶」に関する因子とした。4つの因子の間の相関は、Table 2に示した。

これらの因子ごとに項目の回答得点を加算し項目数で割った値を下位尺度得点とした。尺度得点が高いほど、相手への配慮、機嫌取り、仲間意識、礼儀としての挨拶に関する笑いを多く示すことを表す。

Cronbachの α 係数を求めたところ、尺度全体が.62、相手への配慮が.63、機嫌取りが.62、仲間意識が.52、礼儀としての挨拶が.49であった。尺度全体が低い値であるが、少ない項目数

Table 2 中国人参加者の作り笑い尺度項目に対する因子分析結果（プロマックス回転後の因子負荷量）

	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV
第 I 因子 相手への配慮 ($\alpha = .63$)				
11. 他の人と一緒に何か怖い目に遭った後は笑い顔を見せようと努めることがある	.630	.010	-.063	-.064
16. 相手が不愉快そうな時、わざと笑顔で接するようにする	.559	-.014	.004	.023
17. その場の雰囲気を和らげるために、人を笑わせようとすることがある	.542	-.028	-.056	.056
13. 怒った直後に、笑顔を見せて相手を許すことがある	.459	.061	.143	-.016
第 II 因子 機嫌取り ($\alpha = .62$)				
7. 目の上の人に会うときは、笑顔で接するようにする	-.003	.677	.064	-.010
6. 仲間が笑っているときは、面白くなくても笑うふりをする	.015	.647	-.008	-.001
第 III 因子 仲間意識 ($\alpha = .52$)				
20. 自分が所属しないグループのことをからかって仲間同士で笑い合うことがある	.048	-.053	.684	.091
15. グループの和を壊すような行為をした仲間をからかって笑いにすることがある	-.068	.123	.501	-.024
第 IV 因子 礼儀としての挨拶 ($\alpha = .49$)				
2. 内心嫌っている人でも、笑顔で挨拶する	.004	.100	-.197	.566
3. 初対面の人と会う時は、笑顔で絶やさないようにする	-.012	-.128	.138	.517
1. 悲しい気持ちの時に人と会う際は、特に笑顔を示そうと心がかける	.005	.060	.096	.388
因子間相関	因子 I	.336	.080	.403
	因子 II		.180	.286
	因子 III			-.032

として内的整合性をある程度有していると考えられる。本研究は中国人の作り笑いの表出概況を窺う視点で、 α 係数が.50以下と低い「礼儀としての挨拶」因子のみ、これからの分析から除外した。

2. 作り笑い表出の特徴

作り笑い表出の特徴を明らかにするために、日中参加者ごとに作り笑いの下位尺度得点を類似度の指標として、平方ユークリッド距離、カイ2乗測度によるクラスタ分析（ウォード法）を行った。樹形図を切断することによってクラスタ数を決定した。

日本人の表出特徴と性差 日本人参加者のクラスタ分析の結果はFigure 1, 各クラスタの男女比はFigure 2に示した。

各クラスタの特徴を明らかにするために、クラスタごとに参加者性別を独立変数、作り笑い尺度得点を従属変数とした2×4の分散分析

を行った。Figure 3にはクラスタ1, Figure 4にはクラスタ2, Figure 5にはクラスタ3について参加者性別別の作り笑い尺度得点の平均値を示したものである。分散分析の結果、各クラスタについて作り笑い尺度4因子の主効果（クラスタ1, クラスタ2, クラスタ3順に $F(3, 210) = 25.69, p < .001$; $F(2.57, 257.67) = 60.05, p < .001$; $F(2.72, 321.04) = 73.12, p < .001$ ）、クラスタ2, クラスタ3において作り笑い尺度の4因子と参加者性別の交互作用（順に、 $F(2.57, 257.67) = 2.83, p < .05$; $F(2.72, 321.04) = 10.88, p < .001$ ）が有意であった。多重比較の結果、クラスタ1において、雰囲気作りの得点が相手への配慮、本音隠し、仲間意識よりも有意に高かった。交互作用が有意であったため、単純主効果の検定を行った。その結果、クラスタ2について参加者性別における4因子の単純主効果（男女それぞれ、 $F(3, 98) = 10.71, p < .001$; $F(3, 98) = 68.66, p < .001$ ）、クラスタ3について参加

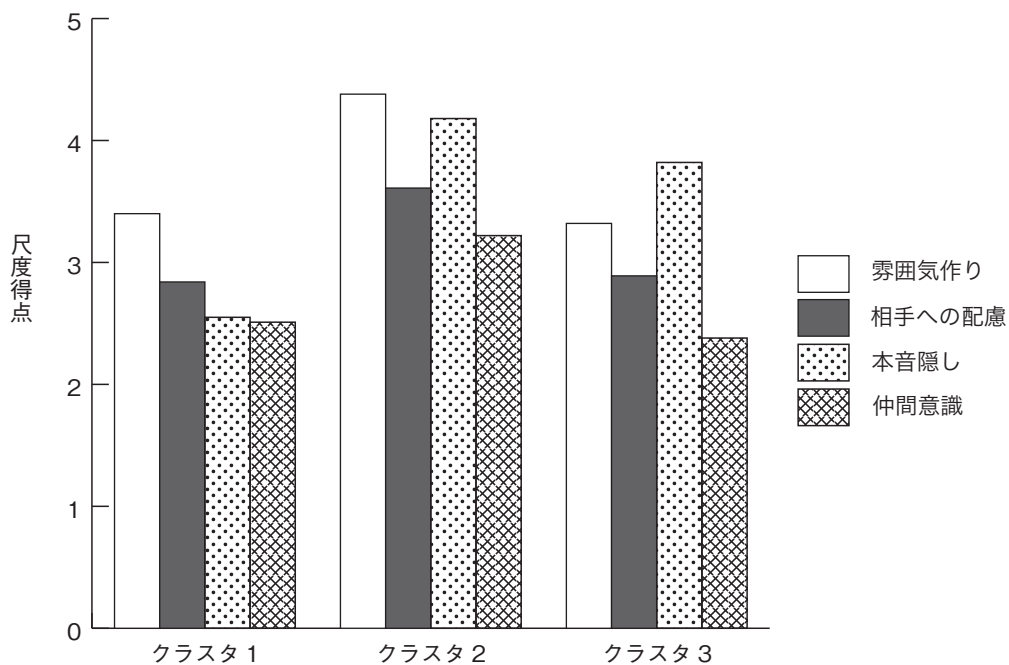


Figure 1 日本人参加者の作り笑い尺度に対するクラスタ分析の結果

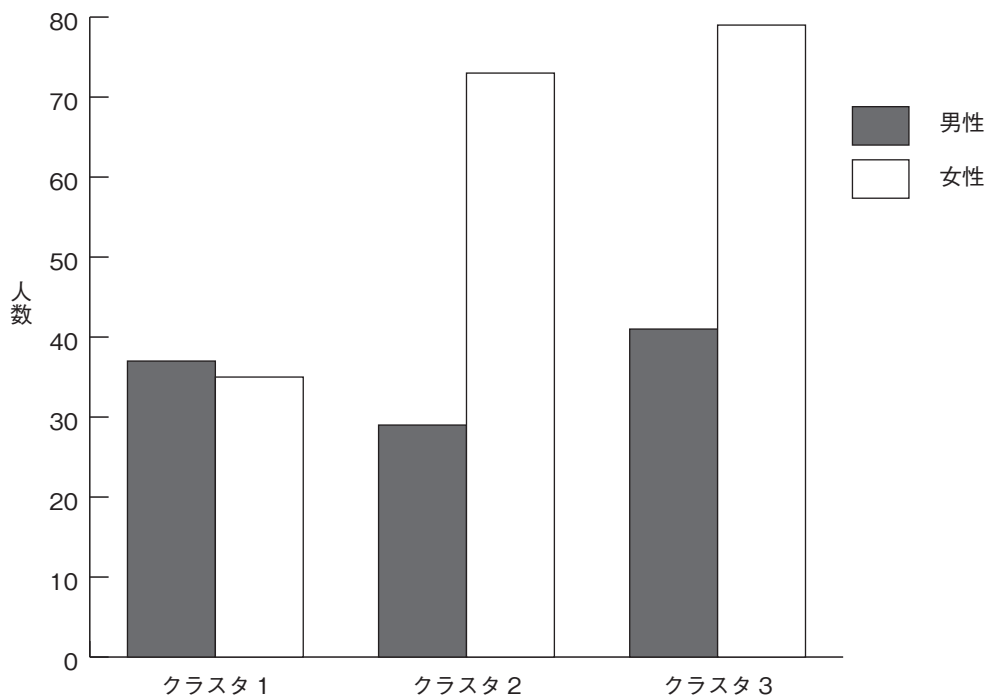


Figure 2 日本人参加者各クラスタの男女比

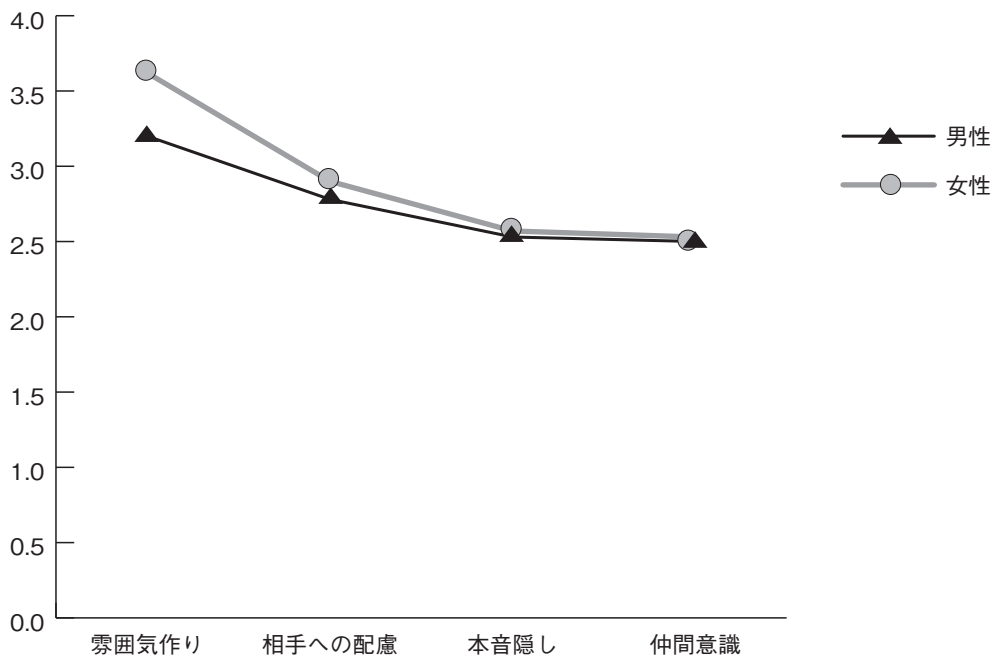


Figure 3 クラスタ1における日本人参加者の作り笑い尺度得点

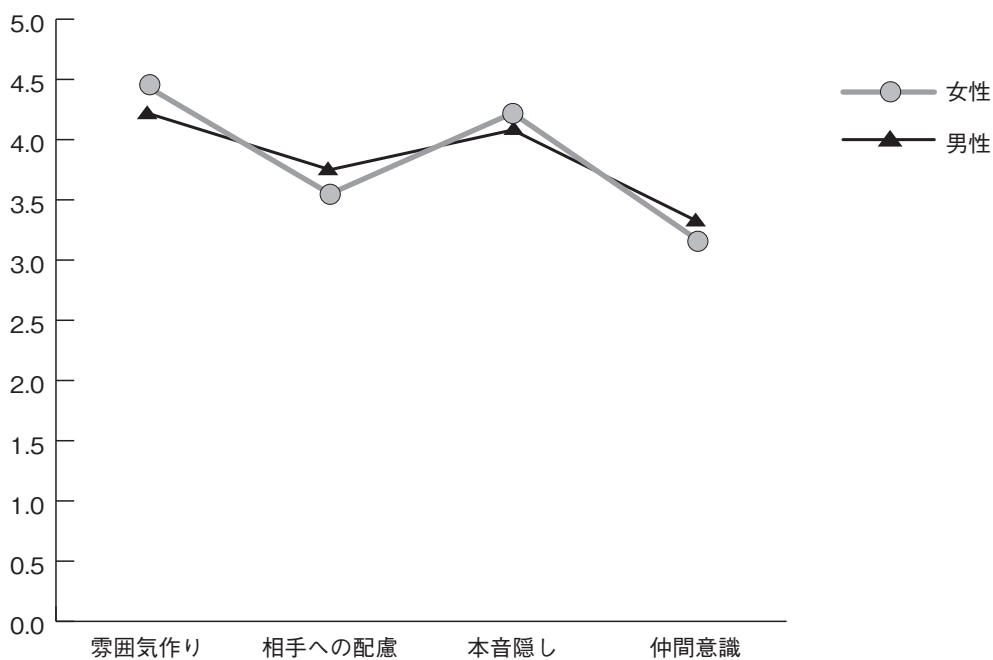


Figure 4 クラスタ2における日本人参加者の作り笑い尺度得点

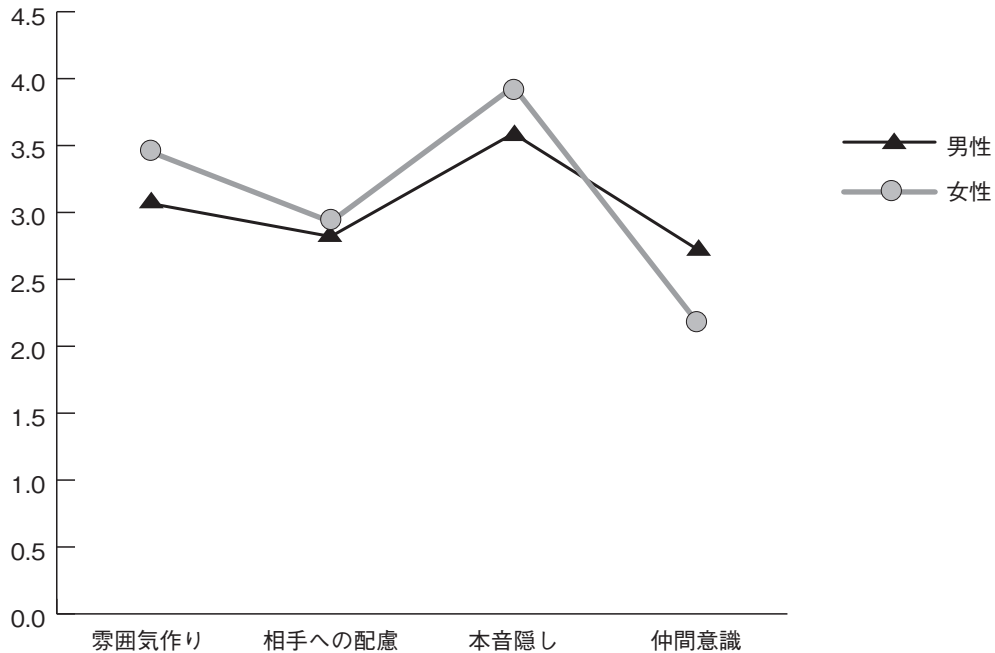


Figure 5 クラスタ3における日本人参加者の作り笑い尺度得点

者性別における4因子の単純主効果（男女それぞれ, $F(3, 116) = 16.70, p < .001$; $F(3, 116) = 97.31, p < .001$), 雰囲気作り, 本音隠し, 仲間意識における参加者性別の単純主効果（順に, $F(1, 118) = 7.41, p < .01$; $F(1, 118) = 12.79, p < .01$; $F(1, 118) = 18.68, p < .001$) が有意であった。多重比較したところ, クラスタ2について, 男女参加者においては雰囲気作りと本音隠しの得点が相手への配慮と仲間意識よりも有意に高く, さらに女性参加者においては, 相手への配慮が仲間意識得点よりも有意に高かった。クラスタ3について, 男性参加者においては, 本音隠し得点が雰囲気作り, 相手への配慮, 仲間意識得点よりも有意に高く, 女性参加者においては, 本音隠し, 雰囲気作り, 相手への配慮, 仲間意識の順で得点が高かった。また, 雰囲気作りと本音隠しにおいて女性参加者は男性参加者よりも有意に得点が高かった一方, 仲間意識において男性参加者は女性参加者よりも有意に得点が高かった。

よって, クラスタ1は雰囲気重視, クラスタ2は雰囲気と自我隠蔽（自分の本当の気持ちを他者にばれないようにする）重視, クラスタ3

は自我隠蔽を重視することが特徴であった。各クラスタによって, 笑い表出の意識には差異が見られ, その特徴が明らかとなった。

中国人の表出特徴と性差 中国人参加者のクラスタ分析の結果はFigure 6, 各クラスタの男女比はFigure 7に示した。

各クラスタの特徴を明らかにするために, クラスタごとに参加者性別を独立変数, 作り笑い尺度得点（「礼儀としての挨拶」因子の α 係数が.50以下と低いため分析から除外した）を従属変数とした 2×4 の分散分析を行った。Figure 8にはクラスタ1, Figure 9にはクラスタ2, Figure 10にはクラスタ3について参加者性別別の作り笑い尺度得点の平均値を示したものである。分散分析の結果, 各クラスタについて作り笑い尺度因子の主効果（クラスタ1, クラスタ2, クラスタ3順に $F(2, 140) = 122.94, p < .001$; $F(2, 122) = 42.35, p < .001$; $F(1.82, 134.39) = 255.67, p < .001$) のみ有意であり, 有意な交互作用が見られなかった。多重比較の結果, クラスタ1については, 相手への配慮は機嫌取り, 仲間意識よりも有意に得点が高く, クラスタ2については, 相手への配慮, 仲間意識

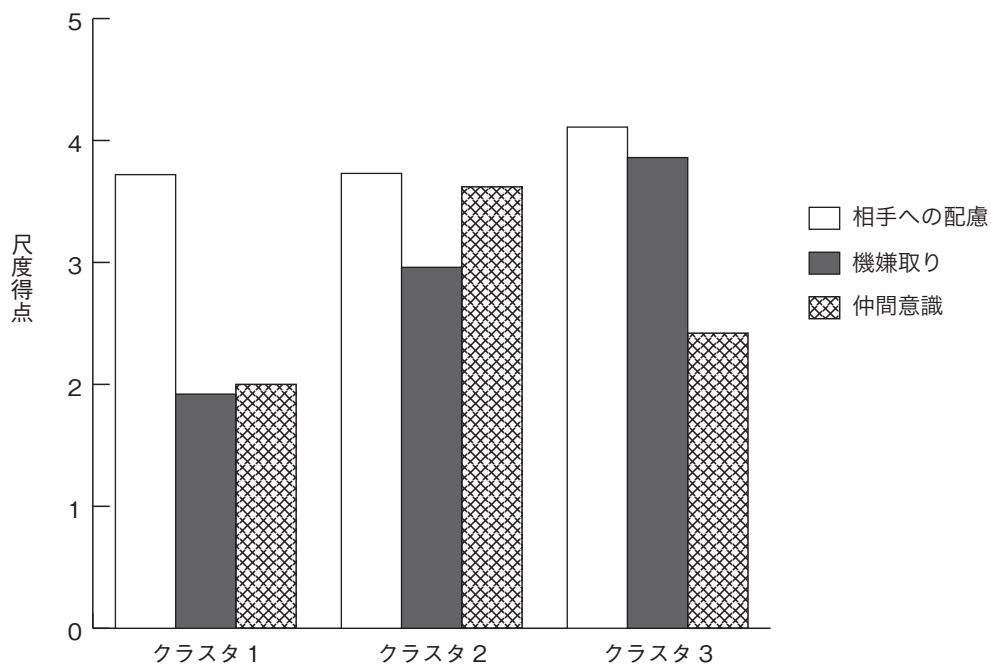


Figure 6 中国人参加者の作り笑い尺度に対するクラスタ分析の結果

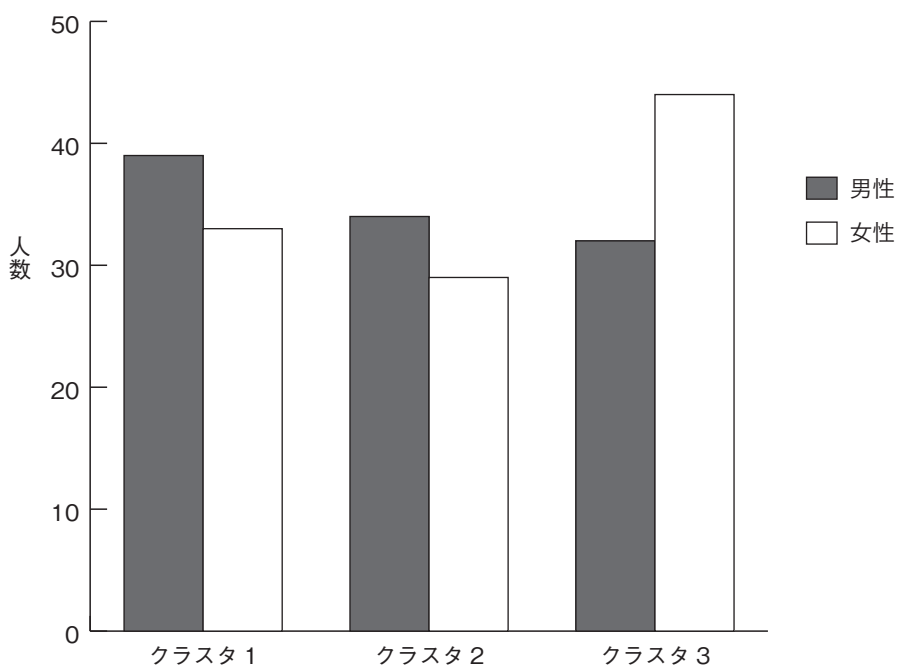


Figure 7 中国人参加者各クラスターの男女比

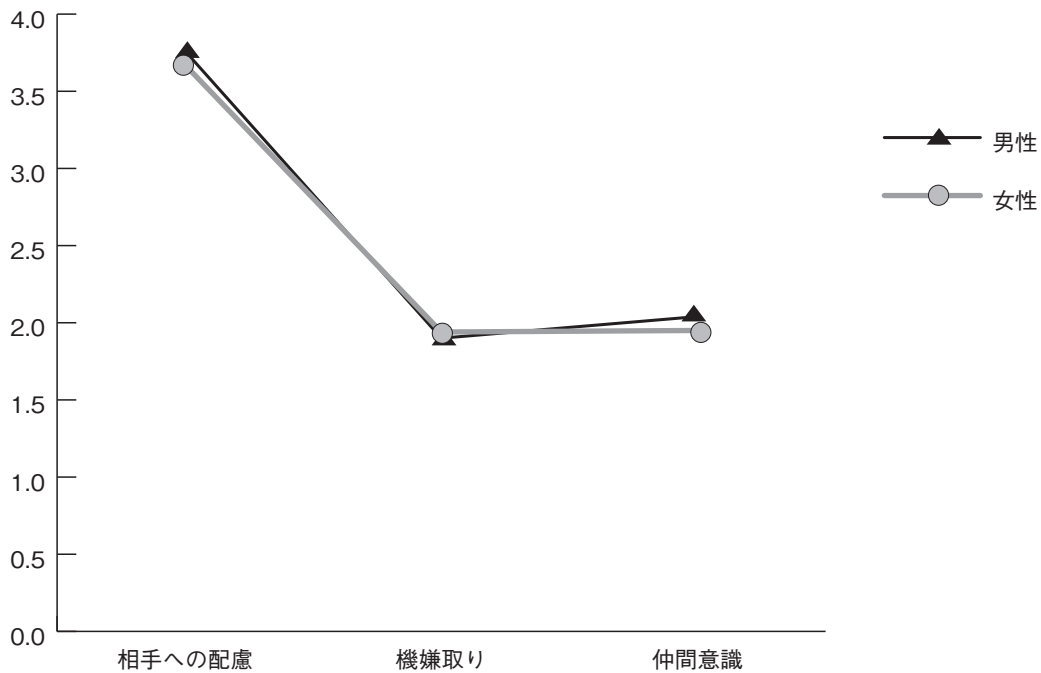


Figure 8 クラスタ1における中国人参加者の作り笑い尺度得点

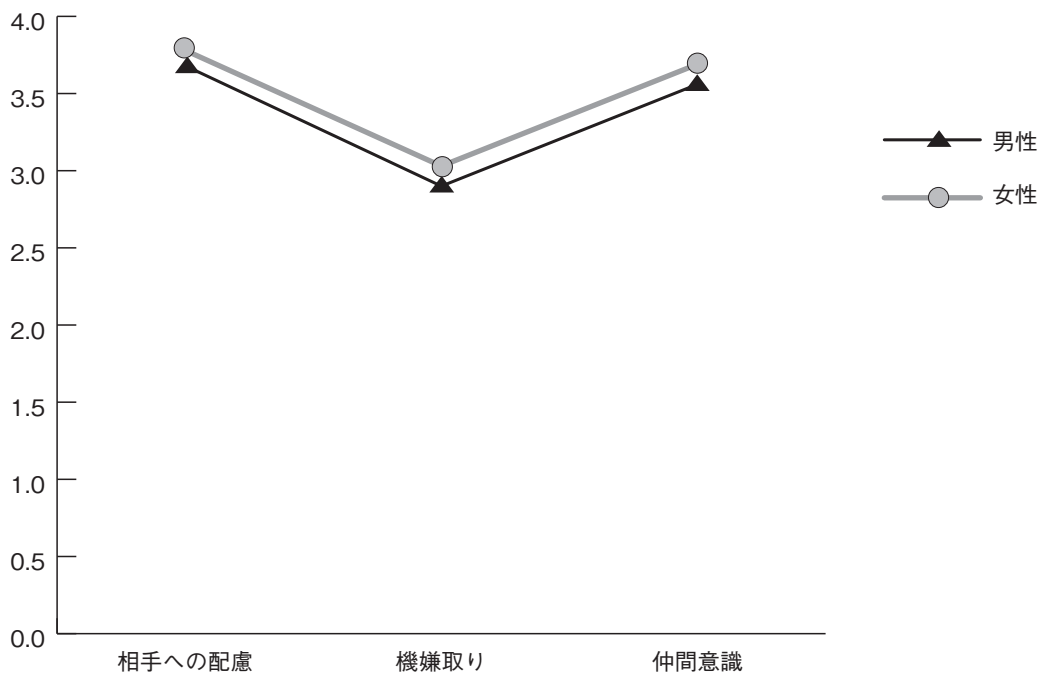


Figure 9 クラスタ2における中国人参加者の作り笑い尺度得点

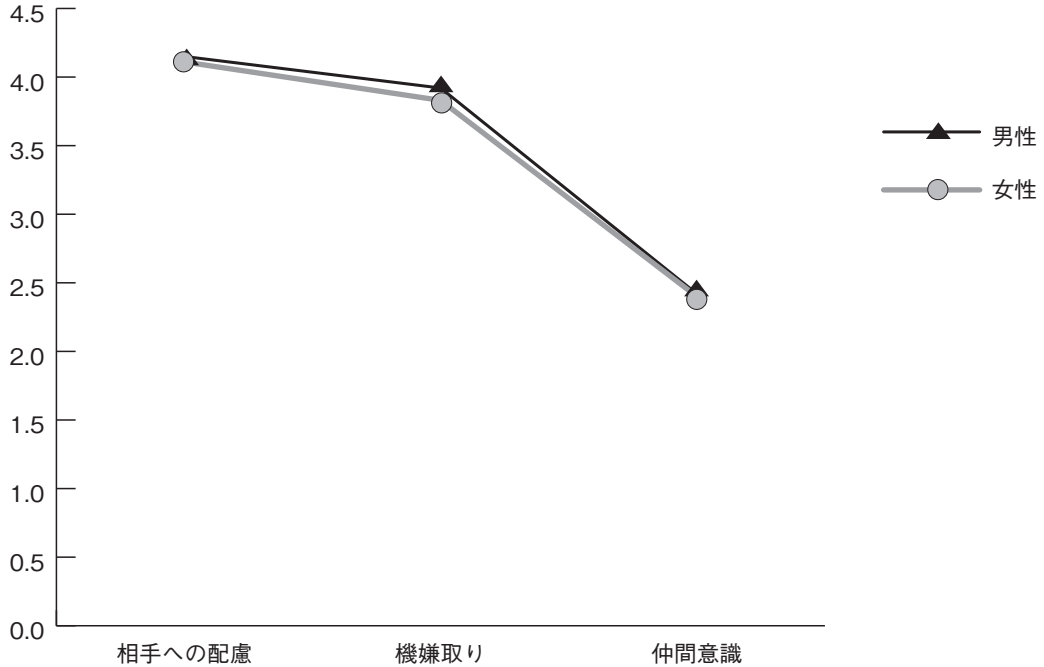


Figure 10 クラスタ3における中国人参加者の作り笑い尺度得点

は機嫌取りよりも有意に得点が高く、クラスタ3については相手への配慮、機嫌取り、仲間意識の順で得点が高かった。

よって、クラスタ1は他者の気持ち重視、クラスタ2は他者の気持ち、仲間との絆を重視、クラスタ3は他者の気持ち、他者の自分に対する印象を重視することが特徴であった。各クラスタによって、笑い表出の意識には差異が見られ、その特徴が明らかとなった。

考 察

1. 作り笑い表出を影響する潜在要因

本研究においては日本人作り笑いの表出には「雰囲気作り」、「相手への配慮」、「本音隠し」、「仲間意識」の4つの要因、中国人作り笑いの表出には「相手への配慮」、「機嫌取り」、「仲間意識」、「礼儀としての挨拶」の4つの要因から影響を受けることが明らかになった。「相手への配慮」と「仲間意識」要因について、日中ほぼ同じく、他人の気持ちを考えながら、笑いを表出することによって他者のネガティブの気持ち

を和らげようとしたり、集団の凝集性や一体感を高めようとしたりしている。しかし、「14.顔で笑って心で泣いたようなことがある」、「19.深刻な身の上話を笑顔をまじえて話すことがある」のような相手に嫌な気持ちをさせない配慮に関する項目は中国人参加者に見られなかった。このことから中国人は自分を苦しむほど相手の気持ちを配慮するまで至らないと考えられる。「仲間意識」は日中ともに作り笑い表出に影響を与えている。このことから同じ集団主義である日本人と中国人において、外集団に対する排他的な特徴が明らかになった。「雰囲気作り」は日本人特有の作り笑い表出を影響する要因として挙げられた。人を笑わせることによって、その場の雰囲気を盛り上げようとすることは、周りの人の反応を意識し、集団全体の心理状態を操作する意図が窺え、集団に置かれた状況において愛他的な態度の反映と考えられる。中国人参加者にも日本人参加者の雰囲気操作に関する項目「17.その場の雰囲気を和らげるために、人を笑わせようとすることがある」とあげられ

たが、同じ要因に影響される他の項目に含まれている意味から相手への配慮の意図が強く、場の雰囲気についての考えが見られなかった。よって、日中参加者が同じ状況で表出される笑いでも異なる意図が含まれている可能性があると考えられる。このような項目は「6. 仲間が笑っているときは、面白くなくても笑うふりをする」と「2. 内心嫌っている人でも、笑顔で挨拶する」があげられる。日本人の嫌悪や悲しみのようなネガティブな表情を隠蔽する文化的機制(中村, 1994)からなる笑いの表出に対して、中国人は相手から好感をもってもらい、礼儀の正しい人のように見せるといったポジティブな印象作りをする心性が窺え、面子を維持する特性の反映であると考えられる。

2. 作り笑い表出の特徴

作り笑いの表出パターンについて、3パターンずつ見出された。日本人参加者について雰囲気重視、雰囲気と自我隠蔽重視、自我隠蔽重視の3パターンが見出され、自我隠蔽重視パターンのみにおいて性差が見られた。女性は男性より雰囲気作り、本音隠しのための笑いを多めに表出する一方、男性は女性より仲間意識についての笑いを多く表出することが明らかになった。この表出パターンを持つ日本人参加者は、作り笑いの表出のネガティブ感情抑制規則が最も働いていて、女性は人間関係の調和を重視して、笑いで雰囲気作りにより心が掛ける一方、男性は集団の一体感をより重視して、笑いでその一体感を維持したり、他者の行為を操作したりする支配的な特性が窺えた。中国人参加者について他者気持ち重視、他者気持ちと仲間関係重視、他者気持ちと自己アピール重視の3パターンが見出され、いずれのパターンにも他者への配慮得点が高く、性差が見られなかった。

全体的には、作り笑いの表出について、日中参加者に影響を与える潜在的要因に異同があり、同じ状況で表出される笑いでも異なる意味を含まれる場合があり、文化差が認められた。日本人の作り笑い表出は他者行動操作と自己感情抑制からなり、中国人の作り笑い表出は他者行動操作と自己感情擬装からなると考えられ

る。表出についての性差が特定された表出パターンを持つ日本人参加者においてのみ認められた。すなわち、日中作り笑いの表出について、日本人は場の空気やネガティブ感情抑制のため多めに表出する一方、中国人の作り笑いの表出は他者の気持ちに多く左右され、日中それぞれ異なる表出パターンを持っていることが確認できた。

3. 本研究の限界と今後の課題

本研究は作り笑い表出の文化差に着目し、数量的尺度を用いて、日中作り笑い表出の意図、特徴とその性差についての検討を試みたが、問題点が残されている。第一に、各下位尺度、特に中国人参加者の場合の内部一貫性が低かった。このことから、作り笑い尺度の内容が中国人に適応されない可能性が示された。作り笑い尺度について、更なる項目内容修正の検討、項目数の増加を推敲することが必要である。第二に、本研究は日中表出者の異なる表出パターンを見出したが、日中作り笑いに対する意識の考察には更なるサンプル数とサンプルの精緻化が必要とされている。本研究では大学生、大学院生を対象としたため、年齢幅が広いにもかかわらず20代前半の参加者が主であった。各年代のサンプル数を増やして、作り笑い表出に対する意識を再検討する余地が残された。作り笑い表出に対する意識の文化差についての解明は、異文化コミュニケーションにおける誤解解消に役立てることが期待される。

【引用文献】

- 浅田由美 (2004). 心理臨床場面における笑いの取り扱い——その効用と実際、展望について 九州大学心理学研究, 5, 153-161
- Ekman, P., (1985). *Telling lies*. New York: W W Norton & Co Inc. (エクマンP. 工藤 力 (訳編) (1992). 暴かれる嘘 虚偽を見破る対人学 誠心書房)
- Ekman, P., & Friesen, W. V. (1969). The repertoire of nonverbal behavior: Categories, origins, usages, and coding. *Semiotica*, 1, 49-98
- Ekman, P., & Friesen, W. V. (1975). *Unmasking the face*. New Jersey: Prentice-Hall. (エクマン P. フリーゼン W.V. 工藤 力 (訳編)

- (1987). 表情分析入門 誠心書房)
- 費 孝通 (1947/ 1985). 乡土中国 北京：三联书店
- 黄 光国 (2010). 人情与面子——中国人的权力游戏 北京：中国人民大学出版社
- 福島明子 (2008). 笑いに対する意識と対人コミュニケーション 御茶ノ水大学人間文化創成科学論叢, **11**, 399-411
- Fox, N. A., & Davidson, R. J. (1988). Patterns of brain electrical activity during facial signs of emotion in 10-month-old infants. *Developmental Psychology*, **24**, 230-236.
- 浜口恵俊 (1977). 「日本らしさ」の再発見 日本経済新聞社
- 井上 宏 (2004). 笑い学のすすめ 世界思想出版社
- Kaye, K. & Fogel, A. (1980). The temporal structure of face-to-face communication between mothers and infants. *Developmental Psychology*, **16**, 454-464.
- Markus, H. & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological review*, **98**, 224-253.
- 南 博 (1983). 日本的自我 岩波書店
- 中村 真 (1991). 情動コミュニケーションにおける表示・解読規則—概念的検討と日米比較調査— 大阪大学人間科学部紀要, **17**, 115-145
- 中村 真 (1994). 日本人学生の表示・解読規則：嫌悪と悲しみの比較文化的考察 宇都宮大学教養部研究報告, **2**, 15-34
- 押見輝男 (1999). 社会的スキルとしての笑い 立教大学心理学研究, **42**, 31-38
- 押見輝男 (2002). 公的自己意識と作り笑い 心理学研究, **73**, 251-257
- Provine, R.R. (2000). *Laughter: A scientific investigation*. New York: Viking.
- Sroufe, L. A. (1995). *Emotional development*. NY: Cambridge University Press.
- Wolff, P. H. (1987). *The development of behavioral states and the expression of emotions in early infancy*. Chicago: University of Chicago Press.
- 楊 中芳 (1991). 中国人, 中国心——人格与社会篇 台湾：远流图书公司
- 趙 特雷 (2002). 表示規則の日中比較研究 国際文化学, **6**, 91-103

—2013年9.25受稿, 2013年11.15受理—

Consciousness on expressions of social laughter in Japanese and Chinese undergraduate and graduate students

Shan Li

Graduate School of Psychology, Mejiro University

Shouzo Shibuya

Faculty of Studies on Contemporary Society, Mejiro University

Mejiro Journal of Psychology, 2014 vol.10

【Abstract】

In the present study, we examine sex and cultural differences within the effect of the factors on expressions of forced laughter in Japanese and Chinese undergraduate and graduate students. 303 Japanese (109 male and 194 female) and 218 Chinese (106 male, 110 female and 2 unknown) subjects participate in a questionnaire survey consisting of the Oshimi (1999) forced laughter scale. Results show that the expressions of forced laughter of Japanese and Chinese are each effected by 4 factors and 2 of them are similar between Japanese and Chinese, which shows that the expressions of forced laughter in the same situations could mean differently due to different cultures. 3 different patterns of expressions are found in each Japanese and Chinese, show different display rules of force laughter. In addition, sex difference is only found in 1 pattern in Japanese. No sex difference is found in Chinese.

Key words: Japan, China, forced laughter, the expressions of laughter, display rule, cultural differences

keywords : Japan, China, forced laughter, the expressions of laughter, display rule, cultural differences